

April
号外
2016

過去と現在を行き来しながら、
未来を考える壁新聞

上町台地
今昔タイムズ



上町台地 今昔フォーラム

vol.5 Document



企画・編集 U-CoRoプロジェクト・ワーキング / 発行 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)

問合せ先 tel.06-6205-3518 (担当: CEL弘本) ※U-CoRo=ゆーころ (上町台地コミュニケーション・ルーム)

ホームページ <http://www.og-cel.jp/project/ucoro/index.html>

第5回「上町台地 今昔フォーラム」を開催。

「タイムスクープ！」

身近なまちの映画館の消息を追って」

— 遺された資料でよみがえる戦前・戦後の地域の生活史

大阪のまちが急速に拡大し、やがて過酷な戦災から復興へと疾走した時代、それはちょうど映画文化の誕生と隆盛の時代に重なります。上町台地をとりまく、映画館の盛衰の軌跡をたどると、身近なまちとそこに生きる人々の喜怒哀楽、地域の生活史が浮かび上がってきます。

このフォーラムでは、導入レクチャーで大阪のまちの変容と映画館の関係を紐解き、戦災等を乗り越えて暮らしの傍らで保存されてきた、貴重な資料の数々をスライドショーで公開。往時の映画文化の実体験談と、映画史・大衆文化史・建築史等の専門家の知見を交え、まちの記憶をよみがえらせていきました。専門家と市民がともに資料を掘り起し読み解く試みが、地域の未来につながっていくことを願っています。

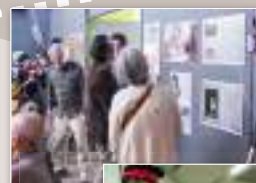


- 日時: 2016年2月28日(日) 14:00 ~
- 場所: 大阪ガス実験集合住宅 NEXT21
2階ホール(大阪市天王寺区清水谷町6-16)
- 主催: 大阪ガス エネルギー・文化研究所 (CEL)
企画: U-CoRoプロジェクト・ワーキング
- プログラム:
導入レクチャー 講師 笹川慶子氏(関西大学文学部教授)
スライドショー&トーク コメントーター
坂本健一氏(青空書房店主)
橋寺知子氏(関西大学環境都市工学部准教授)
古川武志氏(大阪市史料調査会調査員)
交流会

※プロジェクトの詳細は、ホームページ「大阪ガス CEL」「U-CoRo」で検索してご覧いただけます。



▲壁新聞「上町台地 今昔タイムズ」
第5号(1面)



当日は空堀のちんどん芸
集団東西屋のみなさんに、
無声映画で使われた音楽を再現演奏していただいた。

スライドショー

「上町台地 今昔タイムズ」の第5号を制作していくうえで、地域の方々から非常に貴重な資料のご提供をいただきました。そのなかから、未掲載のものを含めて、ここで改めてご紹介します。

娯楽文化が花開いた玉造 ~玉造稲荷神社所蔵資料より

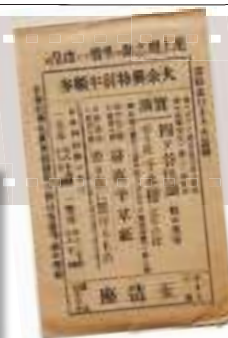
玉造稲荷神社は、漫才作家の故・秋田實さんとの縁も深く、以前から玉造界隈の賑わいや演芸などに関する資料を収集されています。その中から、映画館関係の資料を紹介。



昭和初期の日之出館商店街の写真。この通りには、朝日座、日之出館、洋画専門のヤマト館、元は劇場だった玉造座などの映画館が並んでいた。戦前から戦中には、近鉄線で鶴橋に来て、そこから歩いて砲兵工廠に通勤する人が多く、当時、玉造は心斎橋と並ぶ賑やかさと言われた。

玉造の日之出館の招待券にはADMISSION TICKETの表示とミシン目。同館のモダンな外観をイラストで描いている。

日之出館のご家族優待券には、「大東亜・大マキノ映画封切場」の表示。



玉造座の半額券。当時、玉造座は大阪の映画会社である帝国キネマ直営。元は歌舞伎の劇場で花道が残り何側が浅敷席になっていたという。実演は「四ッ谷怪談」と「引き抜 千本桜」。映画は1927(昭和2)年公開の「緋鹿子草紙」。「若き血に燃ゆるもの」は1930(昭和5)年作品。



玉造座の割引券。山田九州男と岡本五郎の「合同大連鎖劇」の文字。「赤い白鳥」時代の反抗児は、ともに帝国キネマの1930(昭和5)年作品。

●導入レクチャー

大阪のまちの変容と
映画館の関係を紐解く

笹川 慶子氏（ささがわ・けいこ）
関西大学文学部教授

1998年、早稲田大学文学部演劇専修卒業。
2004年、早稲田大学博士課程文学研究科芸術学（演劇映像）専攻単位取得満期退学。専門は映画史、映画美学。著書に『明治・大正 大阪映画文化の誕生―「ローカル」な映画史の地平に向けて』（2012）、『大阪に東洋1の撮影所があった頃（新なにわ塾叢書）』（共著、2013）、『フィルム・アート―映画芸術入門』（共訳書、2007）ほか。

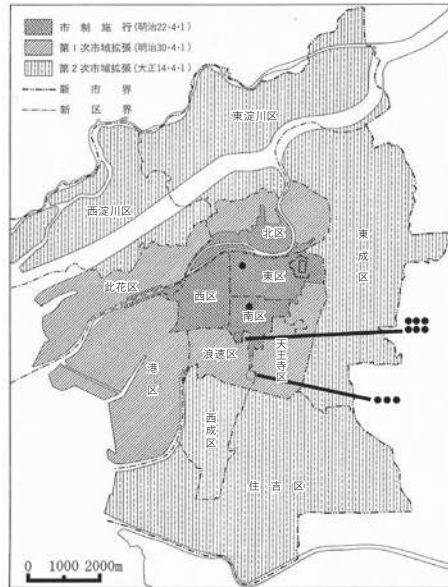
大阪の映画文化の誕生と変化

大阪の映画文化は、いつどこで誕生して、またどう変わっていったのでしょうか。

1889（明治22）年に大阪市が成立した当時、その範囲は、中心部の東区、西区、南区、北区だけでした。1897（明治30）年の第1次市域拡張の際は、各区の周辺部が編入されますが、区分けはそのまま、やはり東西南北の4区。しかし、1925（大正14）年の第2次市域拡張では、前回に編入した部分を切り離して新たに4区を

つくとともに、さらにその周りに5区を加えています。これが「大大阪」と呼ばれる、未曾有の繁栄を謳歌した時代の大阪市のかたちでした。このとき、大阪は人口と面積で東京を抜いて全国1位の大都市となったのです。

映画文化は都市の変容と密接な関係を持っています。1912（大正元）年に大阪市にあった映画館の分布を見ると、千日前や新世界など、最も古い頃の大阪市域の南端に集中しているのがわかります。それが、1926（大正15）年になると、館数は



1912（大正元）年頃の大阪市内の映画館分布図

※『新修 大阪市史』第7巻（1994）掲載の図版「市域の拡張」に映画館の分布状況をポイント（笹川慶子『明治・大正 大阪映画文化の誕生』より）

だいぶ増え、かつ分散していきます。

映画には、その先行芸術である演劇とは異なり、撮影機と映写機が必要でした。この装置は、19世紀末にフランス、アメリカ、ドイツでほぼ同時期に開発されました。もとは視覚的なおもちゃなどに使われていた技術を応用したもので、その開発地は当然科学技術が発達していた国でした。

当時の日本には、そのような資本も技術もなく、映画においては輸入国でした。最初に輸入されたのは、1896（明治29）

した。内容の説明が必要となり、その説明者が後に弁士になっていきました。

都市の変容と
映画文化の密接な関係

興味深いのは、映画を芝居小屋などで上映したが故に生まれた日本の映画文化です。例えば、映画館なのに舞台がある。また花道がある。出語りのための場所があり、座敷席がありと、まるで人形浄瑠璃の小屋。観客も、スクリーンに向かって拍手し声をかけ、食べて飲んで、話し笑う、まるで芝居見物でした。

また芝居小屋で上映したために、新たに生まれたのが「連鎖劇」でした。これは演劇と映画をミックスした劇で、車の追っかけなど野外場面は映画を上映し、見せ場になると映画館のスクリーンが上って俳優が出てきて演じるといったもの。大阪では特に盛んで、千日前の「楽天地」は連鎖劇のメッカと言われました。

では、映画専門の映画館はいつ誕生するのでしょうか。1904～1905（明治37～38）年に日露戦争があり、それを契機に初期の映画ブームが起こります。大阪では1907（明治40）年7月に「電気館」が千日前に開場、これが大阪初の映画専門の劇場でした。ちなみに、日本初は1903（明治36）年開場の東京浅草「電気館」で、大

阪の「電気館」は全国2番目の専門館。そのあとは、千日前に「帝国館」「世界館」「三友倶楽部」「芦辺倶楽部」などが次々とつくり、わずか4年で「映画街」のような空間が誕生します。ここは伝統ある道頓堀とは違い、明治初年までは墓地だったところ。土地代が安く、そこに小規模の小屋が集まっていたので、次々に映画館に変わり易かったのです。

映画人気は、やがて千日前の外にも広がります。まず1911（明治44）年、道頓堀の「朝日座」が新派の芝居小屋から映画館に変わります。また同年、船場の御霊神社の近くに「御霊倶楽部」が誕生。さらに1912（明治45）年に新世界が開業し、いろいろな映画館が建ち並びます。

拡散の大きな転機は、実は大火でした。1912（明治45）年1月に起こった、いわゆる「南の大火」で千日前がほぼ全焼し、映画館街もほとんどが焼失します。その復興までの期間、焼け出された映画興行主は、新世界や九条、天満といったところの芝居小屋を借りて映画上映を始めます。

一方、千日前は復興後はモダンな歓楽街に生まれ変わり、定員1000人クラスの劇場が建ち並びます。とりわけ新たに登場した巨大娯楽場「楽天地」は、大正時代の千日前を象徴する場所となりました。ここは、南海鉄道がターミナル駅近くに

スライドショー つづき

玉造座が発行した「玉造週報」(1925(大正14)年11月12日の表面)。表紙の写真は、弁天小僧の市川百々之助か。裏表紙では「白藤権八郎」の紹介。



城東館・城劇の50余年の物語 ～水野千鶴子さん所蔵資料より

水野千鶴子さんの祖父が、大正時代から玉造駅の北西で「城東館」を経営。戦前・戦後を通じて人気を博しました。それぞれの時代の写真がアルバムなどで残されています。



大正時代の城東館の外観は、正面の2つの塔が象徴的。上映しているのは無声映画で、絵看板も額に入った芝居小屋風の趣。向かって左手に切符売り場と入口。右手の看板には「一週間各土曜日毎二取替」の文字。



城東館の内部。緞帳には「十合（そごう）」と水野さんの祖父が経営する「天王子銀行玉造支店」の文字。舞台脇には弁士席、舞台前には奏楽室がある。観覧席は木製の長椅子。



城東館専属の楽隊の人たち。同館前で撮影。



映画館の入口で記念撮影。上映中の「落第はしたけれど」は小津安二郎の監督作品で1930（昭和5）年公開。「突貫小僧」も小津監督の1929（昭和4）年作品。ともに松竹キネマ制作の無声映画。



城東館の関係者。後列の左から、技師、太夫、弁士、弁士。前列は、技師、弁士、女弁士、はやし方。

歌謡ショーに出演したスターと記念撮影。左端はディック・ミネ。着物の女性は歌手の服部富子か。上映中の映画は松竹作品で、1937（昭和12）年公開の「金色夜叉」と「比翼三度笠」。城東館は1935（昭和10）年頃に建て直して城東劇場となり（通称は「城劇」）、ドイツから新しいトーキーの機械を買い入れ、トイレも早い時期から金属紐を引くと水が流れる水洗式を導入していた。



「玉造週報」(同上)の内部。芦屋時代劇部作品、市川百々之助主演の「弁天小僧 後篇」と芦屋映画現代映画「呪の笛」の紹介。解説部(弁士のこと?)、洋楽部員、和楽部員の紹介など。



大正時代の千日前を象徴する名所となった「楽天地」（当時の絵はがきより）

新世界のミニ版としてつくったもので、館内には視覚的な刺激を与える西洋風の見世物が集められました。例えば水族館。海中で泳ぐ魚を観客が上からでなく横から見る。あるいは回転木馬。座っているだけで周りの風景がぐるぐる回る。さらに展望台。高いところからまちが遠くまで見渡せる。こうした新しい視覚体験のアトラクションが集められたのが「楽天地」で、そこには、当然、映画を上映する場所もつくられました。

映画というメディアは演劇と異なって、どこで上映しても中味は同じですが、このとき、大阪と東京では、上映される映画が微妙に異なっていました。当時、東京では「日活」が圧倒的に多かったのですが、大阪で多かったのは「天活」の映画。天活は、千日前から九条や天満まで、都市の

中心か周辺かを問わず大きな小屋をほとんど押さえていました。それは、天活大阪の支配人だった、山川吉太郎の力によるものです。もともとは船場の

薬問屋だった山川は、映画好きがこうじて千日前で自ら興行を始め、やがて東京の小林喜三郎とともに天活を創始します。その天活大阪の地盤が後に、大阪最大の映画会社「帝国キネマ」に引き継がれていきました。

経済発展とともに醸成される映画文化

こうして、明治末期から映画館は少しずつ増えていきました。劇的に増えるのは大正末期のことです。特に、港区、此花区、北区、東成区、西成区。つまり、大阪という都市が次第に拡大し、周辺に工場が増え、労働者が集まり、まちができる、そういう地域に爆発的に増えていったわけです。

一方、日本の輸出額の推移をみると、

1917～1919（大正6～8）年に突然大きく輸出額が伸びています。それは、第一次世界大戦が勃発して、中国などアジア市場を支配していた欧州諸国の力が弱まったところに日本企業が売り込みをかけた結果。このとき、特に大阪の経済発展は目覚ましく、市民1人あたりの所得平均は1910（明治43）年で大体29円が1921（大正10）年には91円と、3倍以上に膨れ上がりました。

かつて「水の都」と言われた大阪が、この頃から「煙の都」とか「東洋のマンチェスター」と呼ばれるようになっていきます。この経済発展とともに映画館数も急増しますが、そこにさらに、1923（大正12）年9月の関東大震災で東京が壊滅状態となり、経済や文化の中心が関西に移ってきます。このとき、大阪は未曾有の好景気に沸き返り、人口は膨張するとともにその市域も拡張され、「大大阪」の時代になったのです。

このとき、大阪の映画産業も大きく成長します。映画の需要が爆発的に増えた結果、地元の映画会社の帝国キネマは、月間15本の大量生産を始め、その中から、全国的に大ヒットした小唄映画「籠の鳥」が生まれます。利益は莫大で、そのお金で今の東大阪市の長瀬に日本一の巨大スタジオをつくりました。



戦後、配給会社を松竹から大映に変更し、「大映城劇」となった頃の館内。左右の「DAIEI JYOGKI」の文字が目立つ。スクリーン前には当時の人気スター片岡千恵蔵主演の「三十三の足跡」予告。同映画は1948（昭和23）年公開。



昭和30年代後半に配給会社が再度変わり「城南東映」と名を変えた城劇。昭和40年代は高倉健の人気シリーズなどを上演。この後、同館は1973（昭和48）年3月まで営業。



城東劇場の前で記念撮影。「折 皇軍武運長久」の文字など、戦時色の強まりが見える。

需要の多様化に応えた映画文化の新たな展開

こうした大阪の繁栄にともなう映画館の増加と拡散は、映画館の役割そのものを変えていきます。それまでの映画館は、繁華街や神社といった、非日常的な祝祭空間にありました。けれども、大正末期になると都市周辺の労働者が生活する空間にも映画館が登場します。やがて、それが労働者の社交場としても機能するようになるわけです。

例えば、西九条の「明治座」では、男子職工が毎月1日、15日の工場休日に映画を観ており、その翌日には職工の家族が映画を観に来ている例が多いことが記録されています。またこの頃に、若い男女も映画館でデートするようになりました。

一方、都市の中心にある映画館の方は、周辺にできた小さな映画館との差別化を図るべく、どんどん高級化していきます。例えば、スターの舞台挨拶が行われ、夏はクーラーで冬は暖房を備え、内装もレッドカーペットが敷かれた豪華版、館内にレストランがありオーケストラもいるというように、場末の映画館ではできないサービスを提供し始めます。その最たる例が、1923（大正12）年にできた道頓堀の「松竹座」でした。このような映画館のランク差が生じる

のにもない、映画を中央から場末に流す配給のシステムやネットワークもできてきます。

大正末期には、市内で100館近くまで映画館が増えますが、その多くは場末の周辺部にありました。小さい映画館は、余分なお金がないので、高い新作映画は上映できない。だから古い中古映画の上映が中心になりますが、それでも集客力の高い映画がほしい。そこで、主に人気スターの映画をかけるようになっていきます。結果、尾上松之助とか市川百々之助とかの映画があちこちで上映される。つまり、同じスターのいろんな旧作が複数の映画館で上映されることになります。こうして、たとえ封切りを見逃しても、場末で観ることができるようになりました。あるいは、好きなスターの映画を何度も観ることができました。このように、映画館の急増は映画の需要のあり方を変え、多様化を促し、映画のファンと映画に関する文化というものの醸成にも寄与することになりました。

未来につなぐ「映画の都」大阪の姿

1933（昭和8）年に御堂筋が開通します。これにともない、大阪の映画館は、それまでのミナミ一極中心の状態から、ミナミとキタの2極に変わります。特に、阪急電

鉄の小林一三が梅田につくった「北野劇場」は映画ファンの流れを大きく変えたと言われています。また、戦時中にはニュース専門館が登場し、合わせて映画館数は増え続けます。しかし、ほとんどの映画館は、そののち終戦までに空襲で壊滅します。それでも戦後は、再び娯楽を求める人々の声に応じて復活し、やがてその黄金期を迎えることになります。

このように、大阪の映画文化は、災害、経済、交通、戦争などが引き起こした都市の変化とともに変わり続けていきました。かつては大阪のまちには、地域ごとに異なる多彩かつ多様な映画文化がありました。それは中央から周辺に、均質均等に拡散したというわけではなく、さまざまな都市の変容とともに、微妙な地域差を生みながらも固有の様相を示していたわけです。

これまで、大阪と映画との関係は東京や京都ほどには論じられてはきませんでした。しかし、本来、大阪は東京に次ぐ映画の大消費都市であり、深く豊かな映画文化の歴史をもっています。それゆえに、その歴史を示す資料も身近なところにまだ豊富に残されているはずです。今の私たちにできることは、その資料が迷子になって消えてしまう前に、それらを集めて整備し、未来につないでいくことなのだとと言えるでしょう。



スライドショー つづき



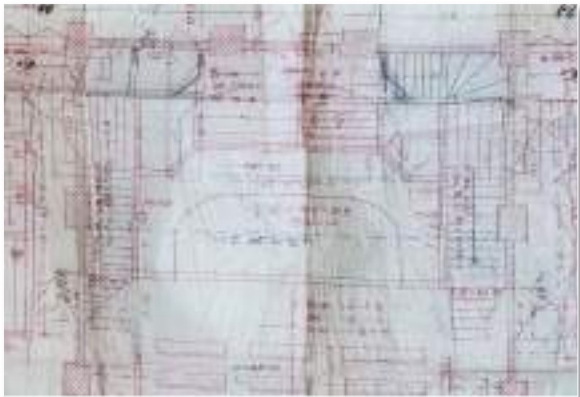
城劇の前で。切符売り場の張り紙には「北支事変」、入口に「大毎・東日国際ニュース」「朝日世界ニュース」の張り紙も。1937. 38（昭和12、13）年頃の撮影か？

劇的変貌を遂げた鶴橋界限 ～井上平八郎さん所蔵資料より

昭和の初め頃に「昭和館」を開館したのを皮切りに、ご親族で鶴橋界限で複数の映画館経営を展開し、最盛期には、「日の丸館」「パーク館」「電気館」を加えた4館を経営。



昭和館の前の葬列の写真（1931〈昭和6〉年10月）。人力車に乗った僧侶や軍人も加わっている。前の道は付け替えられた平野川の土手。館の前面には洋館風の装飾と電球。2階側面には「昭和館」、ひさし横には「皆様の昭和キネマ」と、2つの名が併用されている。



昭和館の1階の平面図。スクリーン前にはオーケストラボックス。小さな舞台があって、実演もできた。2階の観覧席は棧敷席（枡席）で、階段を上がるところが下足預り所。ドームのような天井で、装飾を施してあり、シャンデリアもあった重厚な内装だったという。



現在の勝山北5丁目にあった日の丸館の外観写真（東朝日という映画館を買収して開館）。1935（昭和10）年に改築開館した際の記念写真で、ひさし横には「皆様の日の丸館」、正面には、「〇〇〇東部大封切場」の文字。同館は戦後も営業し、昭和30年代後半に閉館した。

●コメント&フロアトーク・・・・・・・・・・・・・・・・・・ よみがえる身近なまちの映画館の姿と生活史

往事の映画文化についての坂本さんの実体験談、また、建築史や大衆文化史の専門家それぞれのお話をうかがい、来場の方々からのお話も合わせて、まちの今昔を見つめました。

コメンテーター 坂本 健一 氏（青空書房店主） 古川 武志 氏（大阪市史料調査会調査員）
橋寺 知子 氏（関西大学環境都市工学部教授）



■まちと映画がごく身近にあった時代を生きてきて



坂本健一氏（さかもと・けんいち）
古書店「青空書房」店主

1923年、大阪市生まれ。大阪の焼け跡に青空書房を創業。先年、高齢のために一度店を閉じたが、ファンの声に応え、現在は路地の自宅で営業。有名作家との交流も多く、雑誌などにも寄稿。独特の味わい深いイラストも好評。著書に『ほんじつ休ませて戴きます』（2013）、『だれにも一つの青空がある 大阪「青空書房」店主90歳、休業ポスターに込めた人生の応援メッセージ』（2015）、『浪華の古本屋 ざっこんぱったん』（2010）など。

映画とともにあった私の人生

私の生涯を通じて、ずうーっと身近にあったのは、女房と（笑）、次は映画。私の93という歳の大半は、映画とともにあったと思います。

私が子ども時分に観た映画はモノクロで、忍術映画が多かった。自来也、児雷也とかね。あれはぱっと消える。当時の映画技術でも、それくらいは楽にこな

せた。そして映画がピークをなしたときも、やはり忍術物に良作があった。村山知義さんの原作で「忍びの者」。なかなか、しぶくていい作品でした。当時は、まだ忍術使いで、忍者とは言わなかったと思う。彼らのたいへん厳しい境遇と心身が鍛えられていく辛い状態を、村山知義さんは非常にうまく表現していました。

私が住んでいる天満界限には、映画館も古くから2館ありました。戦後は6、7館

に増えましたが、1970（昭和45）年頃には、火が消えたように全部なくなった。こうして映画という私にとってかけがえのない懐かしい文化が消えました。

映画館が生活の側にあった時代

最初のころ、映画は、モノクロで声は出なかった。スクリーンがあり、その前にせいぜい幅2メートルあるかないかのステージがありました。その前にあったのがオーケストラボックス。映画のスクリーンの前にくぼみがあって、楽団の人がそこに入っていました。和洋合奏で、ジャズなんかができる人と長唄とか浄瑠璃とかの演者がここにいっしょにいました。

私の住んでいるまちの映画館では、花道がついていました。それは、昔は芝居小屋だったから。今度は、その花道が邪魔になり、取っ払って通路になった。一番後ろに売店があり、ここでおばさんが休憩時間になったら、「おせんにキャラメル、酔昆

布～」と売りに回っていました。その光景を、私は懐かしく思います。私が子どもだった、70、80年前のことです。しかし、その酔昆布が、まだ健在（笑）。映画館が消えてもしぶとく生き残っている。

「〇〇座」という名の映画館はおそらくかつては芝居小屋だったのでしょう。2階の桟敷はその名残。正面は特等席で、料金もちよっと高いのですが、お茶子さんが、たばこ盆を持ってきてくれました。

私たちが住んでいた下町の映画館は、スクリーンの後ろあたりに通路があった。そこを幕で入れないようにしている。その後ろにトイレがあって、また、近くに小さな祠もありました。つまりトイレと祠が並んである（笑）。

その映画館が、今はコンビニに変わったのですが、この屋上の駐車場には祠が残っています。昔は年に1回くらいお祭りがあって、商店街を練って歩いた。そんなふうにまちと映画館がくっつき、市民生活の中に映画が入り込んでいました。

私は映画館を考えるときに、手風琴（アコーディオン）を思い出します。手風琴のやさしく、広がる音。それは呼吸音と同じ。

もう一つ思い出すのは臭いです。映画館と臭い。でも、いい臭いと思いますか？違うんです。さっき言った、映画館のカーテンの向こう側が、防災上規定があった

のか、広く開けてあり、そこにトイレがありました。その臭いが館内に流れ込んでくる。だから、トイレの臭いをかぐと映画を思い出す（笑）。逆に古い映画を観ていると、臭いを思い出す（笑）。今は、どこも清潔でトイレ臭などしませんが、ふるーい駅とかに行くと、時々そういうトイレにお目にかかります。その臭いをかいだ途端に映画を思い出すわけです（笑）。

復興を支えた日本の映画

市川雷蔵の「眠狂四郎」、勝新太郎の「座頭市」というと1960年代から70年代。シリーズの最後の頃はもうチケットを買って映画館に入る人も少なくなっていた時代。でも、どちらも映画ファンとしてはわくわくするような作品。映画でなかったら見られない迫力と息詰まるような殺陣でしたね。戦後、すべての娯楽がなくなって、世の中が非常にわびしくなった。そんなとき、日本人に大切なことを伝えてくれたのも映画だったと思います。

敗戦で、日本という国が落とされ、貶め

られた。チャンバラ映画も封ぜられた。しかし、映画は確かに日本人を勇気づけてくれたと思います。きっと復興にも影響した。でなかったら、あの惨めな敗戦の屈辱の中から立ち上がることはできなかった。私はそう自分勝手に思い込んでいます。

映画の最後の時は、例えば、客席が揺れるようになってみたり、においを流したり、立体音響にして足の下から伝えられるようにしたりと、あらゆる方法を考えた。でもそういう手練手管で、技巧だけで映画という文化がもつものではない。

やはり、一つの時代が終わり、一つの文化が消えていく。それはしかたがないものだと思います。それが人生というものだというのが、私の考え方です。

スライドショー つづき

日の丸館のものかと思われる映画館の1階平面図。舞台前には「奏楽室」、2階への階段下2カ所に「下足預り処」の記載など。男性席、女性席があり、便所も男女に分かれている。弁士の控え室もあった。



1945（昭和20）年1月11日から17日の正月興行成績報告書を見ると、初日642人、日曜885人、最終日142人という記載、上映映画は戦時色が強く、「将校生徒の手記」「かくて神風ぞ吹く」。

1955（昭和30）年頃の電気館。市川雷蔵主演の「いろは囃子」は同年公開の大映作品。「風流交番日記」は新東宝作品。「夜の部八時より 全部見られます」の立て看板。映画最盛期の頃、電気館は常にお客さんの自転車で溢れていたという。

1950（昭和25）年5月に寺田町駅近くに開館した電気館。大映の封切館として開館し、その後も長く近隣の人たちに親しまれた。正面右上の次週予告には、長谷川一夫が主演した「城ヶ島の雨」。



1967（昭和42）年の電気館。同年公開の大映作品、田宮二郎主演の「監獄への招待」と大映配給のイタリア西部劇「荒野の10万ドル」を上映中。次週予告には、藤田まこと・白木みのるコンビの「てなもんや幽霊道中」。この後、同館は昭和40年代末まで営業し閉館。

まちに漂うモダンの香り ～坂本健一さんが描くイラストの世界

今年で93歳の坂本さんは、若い頃から大の映画好き。戦前から始まり、戦後の映画の最盛期から衰退期にかけて、ご自身で体験し感じてきた映画の世界をイラストで表現しています。



無声映画「丹下左膳」を上映中の映画館。舞台脇に弁士、スクリーン前のボックスにはオーケストラ。2階席の人影も描かれている。

藪入りの日に、映画館前に貼られた活動写真のスチールに見入る住込み店員の様子。



賑わう映画館街のイメージ。おしゃれをして人々が繰り出した。

■モダンシティーに映画と音楽が溢れていた時代



古川武志氏（ふるかわ・たけし）
大阪市史料調査会調査員

1971年、泉大津市生まれ。佛科大学博士課程文学研究科日本史学専攻修了。専攻は日本近現代史（特に大衆文化論）。レコードのSP盤のコレクターとしても知られ、古き良き時代の音楽を演奏する「大阪楽団」の顧問兼指揮者を務める。著書に『モダン道頓堀探検』（共著、2005年）ほか、またオムニバスCD『ニッポンジャズ水滸伝』（天・地・人之巻、2012、2013、2016）ブックレットにも原稿執筆。

映画興行の発祥の地は 大阪の難波

日本の「映画興行の発祥の地」は大阪で、今のなんばマルイのところだという話は、聞かれたことがあるでしょう。今でも1階のエレベータ横に「映画興行の発祥の地」と書かれた銘板が残っています。元は「南地演舞場」。稲畑勝太郎という人が、フランスのリュミエールから機械を買ってきて、そこで映画を上演したそうです。

ちなみに、映画や興行では、ミナミは松竹が大体握っていました。ところが、あそこだけは今も「TOHO シネマズ」ということで、宝塚が握っている。

実は「南地演舞場」を仕切っていたのが、阪口祐三郎という人で、南地大和屋の主人でした。彼が、そこを再開発しようとす

るわけですが、松竹は当然自分のところに話がくると思っていた。しかし、ミナミの旦那の意気地もある。小林一三がそこに目をつけて手に入れ、以来ずっとあそこは宝塚の映画館になりました。

実は戦時中に、この場所は建物疎開にかかっています。その範囲は、北は千日前通りから南は難波駅の手前、東は戎橋筋から西は御堂筋までの区域。そこがぎーっと潰されたわけです。その跡地に、戦後の1953(昭和28)年、宝塚が新しく「南街会館」を建てています。

先年、『大阪市今昔写真集』（樹林舎）を出す際に、私が協力して昭和30～40年をターゲットにして、写真類を集めてもらったのですが、実はその頃の写真はあまりなく、むしろ規模の大きな映画館の写真だけが残っていました。



なんばマルイの1階のエレベータ横にある
「映画興行の発祥の地」と書かれた銘板

個人的な観点からも、僕は泉州の田舎者なので、ちょっとした映画を観るには、電車に乗って「南街会館」まで行ったものです。自分のまちにも映画館はあったのですが、封切を観るとなると、やっぱりナンバまで出た。そういう意味で、ミナミというのは、映画と一体化してあったという気がします。

無声映画の時代とジントの響き

無声映画の時代に使われていた音楽はジントと呼ばれていますが、それはいったいどんな音楽だったのでしょうか。

ということで、1907(明治40)年頃に録音された「天然の美」をお聞きください。

ジントというのは、この「天然の美」に代表されるような音楽です。日本人はワルツが好きで、3拍子の曲に大ヒット曲が多い。それが、「ジントッタ、ジントッタ」となるから「ジント」と呼ばれた(笑)。

明治時代、西洋音楽が日本人のなかに

でしょう。映画スターもいるのですが、活弁の方も、登場すると、「いよっ！ 待ってました！」と大向こうから声がかかる。当時、活弁はその映画館の一大看板でした。

そういう、無声映画のスター活弁も、トーキーの時代になって失業します。東京で有名な徳川夢声や大辻司郎も漫談の方に行くわけです。大阪では、先ほどの泉詩郎は、コロムビアと契約して、流行歌をストーリー仕立てで解説したレコードを何十巻と出した。まるで映画を観ているが如く語りを入れるわけですが、これがよく売れた。それが「歌謡曲説明」。そこに登場してくるのが、西村小楽天でした。師匠は西村楽天で、もとは東京の講談師で大阪に流れてきた人。「楽天」の名は、ひょっとしたら「楽天地」と関係しているかも知れません。岡晴夫や美空ひばりが歌う前、前奏が流れてくると解説を入れるわけです。活弁そのものは消え去りましたが、この流れが、浜村淳さんや玉置宏さんとかにも受け継がれていきました。

では、当時の千日前の音楽を聞いていただきます。「敷島倶楽部」の敷島管弦団による「ウイリアム・テル序曲」です。

大阪のまちなかのモダニズム

みなさん、この演奏を聴いて下手やなあと思いますか？ それとも上手いなと思

いますか？ 実は、山田耕筰という人が、日本で初めてのオーケストラ、日本管弦楽協会をつくったのが1914(大正3)年です。一方、この「ウイリアム・テル序曲」の演奏が1921(大正10)年。7年しか経っていないのですが、その間に、大阪でも一応これだけの演奏ができるようになっていた。音楽学校を出ている人ではない、映画館の楽団員。そう思うと、大阪人の進取の気性というか、技術的なレベルも結構高かったことがわかります。またこういう音楽が、まちなかに流れていて、普通に聴かれていたということ。音楽や映画は、大阪のまちのなかで醸されていたモダニズムそのものだったわけです。

ちなみに、肥田皓三先生が言っておられましたが、日本で最も古くから今も続いている映画館は、恐らく千日前の「敷島」だろうと。明治時代からずっと続いていて、今も「敷島シネポップ」という名前で映画を上演しています。これも宝塚の系列。

最後に、その「敷島シネポップ」前にあった「大劇(大阪劇場)」の写真帳を紹介します。「東洋劇場」と書いていますが、後に「大劇」になります。

あちこちに話が飛びましたが、大阪というまちと、映画、音楽が、当時から今もまちの記憶としてあり続けているということが理解できると思います。



スライドショー つづき

自転車でフィルム運びをする様子。映画フィルムは、多くの場合は何館かで回っていた。昔は、観ていて、あれ、ストーリーちょっとおかしいなと思ったら、間のフィルムが抜けているなんてこともあったという。フィルムが擦れて傷がついていて「雨が降っている」ことも頻繁にあったそう。



映画館の中の売り子さんと販売していたおなじみのもの。



「天満宝塚」では黒澤明の「七人の侍」(1954(昭和29)年公開)を上映。



1935(昭和10)年頃の黒崎東商店街の様子。交番は今も同じ場所にある。

天満駅一帯は、昔は「花屋敷」と呼ばれたミニ歓楽街。映画館や芝居小屋が並び、射的屋などの娯楽場が周辺に多くあった。



1932(昭和7)年頃までの天満駅界隈を描いたイラスト。「天満倶楽部」は映画館、「天満座」は芝居小屋。ちんどん屋が鳴り物をならして賑やかに宣伝している様子が描かれています。

■まちの記憶と建築資料の間から見えてくるもの

橋寺知子氏（はしてら・ともこ）
関西大学環境都市工学部准教授

1965年、神戸市生まれ。1993年、関西大学大学院博士課程修了。博士（工学）。専門分野は近代建築史。「大阪の近代」にさまざまな角度から眼を向ける研究を続けている。著書に『関西のモダニズム建築－1920～60年代、空間にあらわれた合理・抽象・改革』（共著、2014）、「アジアにおける文化システムの展開と交流」（共著、2012）、「アジアが結び東西世界」（2011）ほか。

建築に関する資料の
意味と楽しみ方

今回は、建築に関する資料がどういう意味をもつのか、あるいは、どういうところが面白いのかについてお話をしようと思います。

では建築資料というのはどういうものでしょうか。今会場に並んでいるもののように、図面や写真だけでなく、建築の仕様書とか確認申請書とかの届出書類なども建築資料ということになります。

そのなかでも、やはり写真類は非常に重要です。工事中のものや竣工時の写真はもちろん大切ですが、歴史的には完成後の、使っている際の写真も貴重なものです。しかし、そうした写真を撮るのはよほどの建物好きの人で、数はとても少ない。その意味で、人が建物の前に立っているような記念写真などにも、十分に価値があるものがあります。

もう一つ、建築専門誌に、こういう建物

ができましたと載ることがあります。そこで、今回は大阪の建築だということで、私は「建築と社会」という雑誌を調べてみました。これは日本建築協会という団体が出している建築専門誌です。来年に100年を迎える同会は、本部が大阪にあったことで、その雑誌には大正期の創立以降、関西の建物がよく掲載されています。

まず、その雑誌の総目次をずっと調べてみましたが、映画館の掲載は本当に少ない。北野劇場は映画館ではなく、劇場ということで昭和13年1月号に載っていました。同じ13年2月号には、梅田娛樂街という名前で、北野劇場と隣の梅田映画劇場が一緒に写真に出ています。梅田映画劇場の方で調べると、梅田地下劇場も載っていましたが、内装のストライプの壁などはモダンな時代のデザインをよく表しています。

このように、比較的立派な劇場の場合は、雑誌などに掲載され残っていきま

す。しかし、今日会場に並んでいるような資料は、そういう専門誌には載らない規模の小さなもの。つまり、身近なものほど公式資料としては残りにくいということです。ですから、みなさんのお手元に残されている写真やパンフレット、それから昔の話をうかがうことも含めて記憶というものが、この時代の建築文化を知る上ではとても大切だということが言えると思います。

「中村儀右衛門資料」から
わかること

明治から大正にかけて道頓堀や千日前で活躍した大工棟梁が持っていた資料群に「中村儀右衛門資料」（関西大学なにわ大阪研究センター蔵）があります。全455点のうち約300点が建築関係資料。多くは芝居小屋のものですが、これらの特徴は、設計や施工をした人が持っていたもので、設計変更や検討内容など、途中資料も多く含まれていることです。

この資料の中に映画館と思えるものが何点かあります。例えば、「電気館」と裏に朱書きしてあるものは、「大火の後」と書いてあり、南の大火の後に仮設的に作った図面だとも思えます。同じく「大参電気館」のメモがある図面は、下側が道路で、そちら側が入口、また真ん中に「写真室」とあって、たぶん映写室がある。この館には2階があり、3階の図面もありました。その3階には「運動場」とありますが、それは多分、少し広めのバルコニーのようなところで野外かもしれません。この3階には左右に塔みたいなものが付いています。

もう一つは「小櫻館」の図面。「映写室」「変更」と書いています。手前のところには「増設」とも書いてあって、もともと芝居小屋なのか寄席なのかわからないですが、それを改装して映写室をつくったのではないかと思える図面です。舞台のところの拡大図には、楽屋は「在来のとおり」と書いてあって、その手前には「縮小」と書いてあります。資料を読み込んでいくと、設計が変わっていった過程が見えるわけです。

さらに座名不詳の資料。下側に千代崎橋筋と道路名が書いてあります。2階は馬蹄形のエプロンになっていて、椅子席もあります。この館にも、2階両側に「塔」と書いてあって丸い物がついている。玉造の「城東館」もそうですが、両脇に塔がつく例が意外に多い。例えば、当時有名な映画館だった「芦辺倶楽部」にも両側に塔がありましたが、こうした建築的な特徴は他所にも伝播するのではないかというのは、私の勝手な推測です。

「四ツ橋倶楽部」は、長い平面の建物ですが、図面の舞台のところに「弁士控え室」と書いてあり、奥には弁士用の手洗いがある。先ほども話題に出ていましたが、舞台両脇にトイレがあるのが映画館の定番だというのがわかります。

この資料群では、平面の図面がほとんどでしたが、大工さんは、こういう平面図があれば、だいたいどうつくるかの想像がつくわけです。だから図面類がぎっちり揃ってない例も多いのですが、「四ツ橋倶楽部」には、断面図や仕組みが分かる図

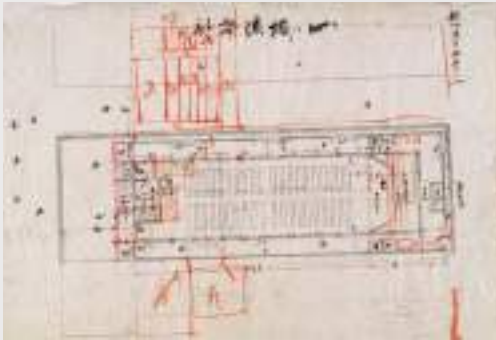
もあります。こういう資料があると数値なども正確に探っていくことができます。

また、仕様書、適要書と呼ばれる、文字で書いた資料もあります。「第一電気館」と書いてあるものは、「寄席」を消して「小劇場」となっていますが、「電気館」だから映画館かと思われ

れど本当は木造だとか、どういうスレートなのかなどを理解することができます。

この中村儀右衛門資料には、写真資料がほとんどありません。しかし、こういう、設計者あるいは施工者の建築の専門の資料、それも考え直したりしている途中の図は非常に貴重です。それとは別に、写真などの資料類や実際に行ったことがある方の記憶とかがわかるような資料も大切。この両者が合わさっていくと、そこからわかっていくことがたくさんあるはずだと思います。

中村儀右衛門資料のうちの映画館関係の図面



「四ツ橋倶楽部」の平面図(左)と断面図(上) 朱で変更案(?)が描かれている。



「小櫻館」増設修繕図 劇場から映画館への改修か。

関西大学なにわ大阪研究センター蔵

■ご来場の皆様からコメント 映画とともにあった生活や幼き日の思い出

『ぜんぶ大阪の映画やねん』 著者の
武部好伸さん からのお話武部好伸氏
(たけべ・よしのぶ)
エッセイスト

1954年、大阪市生まれ。大阪大学文学部美学科卒業。読売新聞記者を経て、1995年からフリー。関西大学非常勤講師、日本ペンクラブ会員。著書に、『ケルト映画紀行 名作の舞台を訪ねて』（1998）、「シネマフィーニ 銀幕のなかの洋酒たち」（1999）、「ウイスキー アンド シネマ」（2014）ほか。

僕が生まれたのは、ここから北西へ300mほどのところ、今の中央区龍造寺町です。幼稚園は銅座幼稚園で、小学校は谷町四丁目の南大江小学校。中学校は天満橋にあった東中学で、高校はこの近所の清水谷高校。つまりほぼこのあたりだけで育ったわけです（笑）。

僕は2000（平成12）年に『ぜんぶ大阪の映画やねん』という本を出しました。そ

の際に、織田作之助の映画「夫婦善哉」や「わが町」、また「王将」「ガキ帝国」「ブラック・レイン」とか、大阪を舞台にした映画や大阪人を主人公にした映画を同書ですべてリストアップしました。

それで自分では一段落つけたつもりでいたのですが、昨年、ある人から「武部さん、そろそろ第二弾を書きなはれ」と言われました。確かにもう16年も経っている。そこで今年の正月からあれこれ一生懸命に調べて、現在原稿を執筆中です。その結果、大阪と映画についての大発見をしました。今は言えませんが（笑）。

ただ、大阪人がすごく映画にかかわっていたことだけは確かです。実際、活弁の第1号は上田布袋軒という大阪は新町生まれの人。日本最初の映画界の大スターは駒田好洋で、ジントヤやりながら、巡業していたその人も、もともとは大阪の人間。それから日本最初の映画の文献も、稲畑勝太郎さんが持ってきたシネマトグラフの解説書で、天満橋の出版社で発行したもの。だから映画草創期のことを考えれば、

大阪はものすごく映画にとって大事な場所です。

自分の子ども時代の思い出としては、なんと言っても松屋町の末吉橋のところにあった「中央シネマ」で、よく行っていました。一番覚えているのは「マタンゴ」という東宝の怖い映画。ほかにもなつかしい思い出がいっぱいあります。

上六の映画館にも行きましたね。それで、ちょっとよそ行きで映画を見るときはミナミです。上本町二丁目から市電に乗って行く。長堀川の川べりを走って行く光景をよく覚えています。子どもながらに、そんな風情に浸りながら心齋橋へ。そこで降りて、アイスクリームを食べる。親父は必ず四つ橋をぐるりと歩いて渡りました。それからミナミに行って、そこで映画を観ていました。

上六ならつかかけで行けたが、心齋橋はちょっと微妙。梅田の北野劇場に行くときは大騒ぎで、僕も母もよそ行きの格好。いろいろな意味で確かに、大阪では庶民の生活と映画文化が密接に関わりあっていたと思います。

「城東館」関係の資料をご提供いただいた 水野千鶴子さん から ごあいさつ



大正時代、祖父が「城東館（後に城東劇場・城劇）」を玉造駅前に開館。その事業を引き継いだ父親を1945年8月14日の空襲で失うが、かろうじて残された映画館を母親が苦難の中で運営するのを協力して支えた。

水野千鶴子氏（みずの・ちづこ）
玉造で映画館「城東劇場」を運営

玉造で映画館をしております、「城劇」の名でみなさんにかわいがっていただきました。戦前は松竹の映画で、戦後は大映、それから東映となりまして、結局1973（昭和48）年に閉館いたしました。

戦争中、私どもの映画館は鉄筋でしたので、軍隊に軍需工場として徴収されるこ

とになっていたのですが、屋根が瓦だったので免れた。でも、父は1945（昭和20）年8月14日の空襲で近くの防空壕で爆死しました。その後、母がほんの2、3人から映画館を再開し、戦中・戦後もおかげさまで映画を続けさせてもらっていました。

今日は母の17回忌です。その帰りにちょっと寄らせていただきました。残っていた写真を見ていただいて、今日もこうして皆さんにお目にかかる機会がえられました。ありがとうございます。

コメンテーター・青空書房店主の 坂本健一さん から、もう一言

今も元気で作家活動をされている筒井康隆さんの本に『不良少年の映画史』（文春文庫）というのがあります。彼のお父さんは博物学者で、一時期、天王寺動物園の園長もやっておられた方。筒井さんは少年時代から非常に英才で、優秀な子だけを集めた

芦池小学校に通っていましたが、戦後も天神橋筋六丁目を降りて、乗り換えの際に私の店にちょこちょこやってきました。その理由は、実は、お父さんの本を持ち出して売りにきてたんですね（笑）。そうしたお金で、彼はあっちこっちで映画を観た（笑）。その時分、焼け野原で会う不良少年たちは、たいがい荒んでおりましたが、筒井さんはシャキッと背筋が伸びた少年でした。私はのちに、その姿を絵に描いたのですが、その時に他の戦災孤児に似てるように描いたら、「僕は、こんなに違う。もっとちゃんとしていた」と本人から抗議が来た（笑）。それで、私の本には描き直した絵が出ています。

筒井康隆という作家をつくったのは、あちこちの映画館で観たいろいろな映画。偉大な作家の才能が、それによってますます啓発された。彼は現在も見てくれと違い、実際は非常に健全な人で、人に心配りのできる優しい方です。



交流会では活動写真のジントラの再現演奏も



飛び込んだ世界には、活動写真の楽士たちが！

林幸治郎氏（はやし・こうじろう）

ちんどん芸能集団「ちんどん通信社」代表（社名は「東西屋」）

1956年、福岡市生まれ。1981年、立命館大学経営学部卒業と同時に大阪の老舗ちんどん屋「青空総合宣伝社」に入社。1984年「ちんどん通信社」旗揚げ。1997年、有限会社「東西屋」を設立。全国での活動のほか海外公演も20数回におよぶ。著書に『ぼくたちのちんどん屋日記』（共著、1986）、「ちんどん屋です。」（共著、1993）、「チンドン屋！ 幸治郎」（2006）ほか。

私は、ちんどん屋の世界に入って35年ほどですが、初めの頃は、もとは活動写真の楽士だった方が幾人か残っていました。なかでも大野さんは、昼間はちんどん屋をしながら、夜は北新地でピアノを弾くバンドマン。私を仕事に連れて行ってってくれながら、活動写真時代の話もよく聞かせてくれました。昔の仲間を集めた無声映画の上映会などがあったときには、活動写真で使うお囃子を教えてくれたこともありました。

それより以前の話ですが、私の父親が1920（大正9）年生まれで、若い頃から「目玉の松ちゃん」こと尾上松之助など、映画の大ファンでした。だから、酔っ払うと必ず当時の歌とかが出てくるわけです。

～ 花のパリーか、ロンドンか

～ ああ、春爛漫のローマンス

父親がこんな名調子をよく口にしていたので私は子どもの頃に聞いていて覚えただけです。

それから、和物の無声映画のお囃子もの

では、常には「吾妻八景」などがよく演奏されていたようです。

～ 東山三十六峰静かに眠る丑三つ時

鴨の河原の静寂を破り、

にわかに起る剣戟の響き！

こんな名調子や演奏をバックにして、チャンバラの場面が出てくるわけです。

昔はこうした活動写真の音楽をハーモニカで吹く人も多く、楽譜も出版されていました。以前に私は、四代目の旭堂南陵さんから楽譜をたくさんいただいたのですが、同時にいろいろと教えてもらいました。この曲はこんな場面、水のシーンではこんな音、舟が出てきたらこうと、決まりごといろいろありました。



それから、「竹になりたや」という曲があります。これは親子の別れなど、深い情愛を描くような場面によく演奏されました。

次に、「三十三間堂」。こうした曲はいわばスタンダードナンバーで、寄せ集めの楽士であっても、みんなが演奏できるわけです。また、「大名行列」。松の廊下など、大名がひとりずつ参上するような場面では、こういう曲が出てくる。

和洋合奏の形態がつくられたのも無声映画時代の映画館でした。日本調の場合は三味線などや和楽器で、洋物でキートンなどをやるときは洋楽器が基本ですが、時には両方を使う。

しかし、映画がトーキーになり、仕事が次第になくなってくると、楽士からちんどん屋に移る人が出てきたわけです。

それでは「乱刃」。これは「血煙高田馬場」（1937〔昭和12〕年公開）という、阪東妻三郎主演の名作のラストシーンに使われたものの。最後は、この曲でしめさせていただきます。

